

グスタフ・フェヒナーの生命思想-精神物理学との関わりにおいて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2015-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩淵, 輝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17719

グスタフ・フェヒナーの生命思想

——精神物理学との関わりにおいて——

岩 淵 輝

一 はじめに

グスタフ・テオドル・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner; 1801-1887) は科学的心理学の生みの親である。十九世紀のドイツにおいて科学的心理学の一分野、精神物理学 (Psychophysik) ⁽¹⁾ を創始したことで知られる。感覚を数量化する手法を導入し、思弁的な学とされてきたそれまでの心の学を科学に「高める」ことに貢献した。フェヒナーの名著『精神物理学原論』(Elemente der Psychophysik) の刊行年度にちなんで、一八六〇年を科学的心理学の成立年とみなすことがある。

一般にフェヒナーは科学者として知られているが、実はフェヒナーには哲学者・思想家としてのもう一つの顔があった。彼は精神物理学周辺の科学的著作の他に、哲学・思想・宗教から死後の生についての論考に至る哲学的・存在論的著作を多数残している。

それら科学的著作と哲学的・存在論的著作とは互いに独立無關係に展開されたものとみなされがちであるが、両者はフェヒナーの中では密接不可分の關係にあった。そもそもフェヒナーが科学的心理学を興したのは哲学的動機に導かれたことであり、科学的心理学の金字塔『精神物理学原論』もフェヒナーにとってみれば「あくまで哲学的根本思想を基礎づけるための方法論でしかなかった」⁽²⁾。だが、「皮肉にもその根本思想の方は無視されて、もっぱらこの方法論だけが、心理学を哲学から引きはなし、実験心理学、つまり科学的心理学を成立させた第一歩と評価されることになった」⁽³⁾。フェヒナーの若かりし頃には哲学的動機に牽引された科学研究はさほど珍しいことではなかったが、フェヒナーが五〇代を迎える一八五〇年頃から状況は変化し、科学者は哲学に言及することを避けるようになる。科学者の仲間入りを果たすことを目標にしていた当時の心理研究者たちも、この頃から自分の仕事の存在論的な意味を語らなくなって行く。例外的にフェヒナーのように存在論を語った場合は、その仕事の存在論的主張は無視され、存在論を除いて矮小化された純粋に科学的な側面のみが支持されることになった⁽⁴⁾。こうして物理世界と心の世界の關係、あるいは身体と精神の關係を説明せんとするフェヒナーの壮大な意図の下に生まれた精神物理学は、いつしか後統の精神物理学者たちによって、単なる「刺激と反応の間の数量的關係」を調べる⁽⁵⁾学⁽⁶⁾に貶められることになった。

今日、科学主義の行き過ぎによる様々な弊害が生じている理由の一つは、科学における哲学的・存在論的基盤の喪失にあると思われる。もう一度科学に存在論をとり戻し、理科系的学と文科系的学とが一体化した総合的な学を打ち立てることは今後のわれわれの重要な課題であるが、その際にフェヒナーの試みは大いに参考になるはずである。そこで手始めに、フェヒナーの科学的著作と哲学的・存在論的著作との関連性を浮き彫りにし、一つの根本思想が科学と哲学に分化・発展していることを明らかにする作業が必要であろう。本稿の目的は、そうした検証作業を行なうこと、および、フェヒナーの生命思想の特徴を探ることにある。

二 フェヒナーの哲学的思索と科学的心理学

アメリカの心理学史家ボーリングは、著書『実験心理学の歴史』の中でフェヒナーの生涯を次のように区分している。すなわち、生理学者として七年（一八一七—一八二四）、物理学者として十五年（一八二四—一八三九）、病いの時期十二年（一八三九—一八五二）、精神物理学者として十四年（一八五二—一八六五）、実験美学者として十一年（一八六五—一八七六）、これら全期間のうち哲学者だった時期が少なくとも四十年（一八三六—一八七九）、さらに、世間の称賛と批判をうけて精神物理学へ再び目を向けるようになった最晩年の十一年（一八七六—一八八七）、と。またボーリングは、フェヒナーは偉大な哲学者でも偉大な生理学者でもなかったが、精密な科学的実験を導入し新しい心理学の基礎を築いた人物であると紹介している。⁽⁷⁾ フェヒナーが哲学に興味を持った時期と精神物理学に従事した時期とを互いに独立に記載するこうした区分は、フェヒナーの哲学と精神物理学とが互いに無関係なものであるという誤解を招く恐れがある。ボーリングは二十世紀の心理学史研究に多大な影響を与えた心理学史の大家であるが、その大家がフェヒナーの哲学に無関心だったことが、後続の心理学者たちのフェヒナー理解を多かれ少なかれ歪めてしまったものと思われる。

実際はフェヒナーの哲学と精神物理学とが密接不可分のものであったことは、フェヒナーの哲学的著作と科学的著作を比較・検討すればすぐに判明することなのだが、従来の研究においては両者の比較作業は極めて不十分であった。その理由の第一は、研究者の専門の細分化にある。先にもふれたように哲学と科学が分断・細分化され、各々の研究が別々の専門家によってなされるのが普通になった今日、フェヒナーの哲学的著作と科学的著作の両方を把握している研究者は少ない。理由の第二は原典軽視にある。可能な限り原典にあたることは研究者として守らねばならない基本中の基本

のはずであるが、残念なことに心理学の世界では長い間、原典確認がおざりにされる風潮があった模様である。例えば、フェヒナーと同時代の人物でフェヒナーの学生でもあった実験心理学の父、ヴィルヘルム・ヴントの心理学が曲解された理由は、心理学者たちがボーリングの『実験心理学の歴史』のヴントに関する解説を原典で読まず、孫引きに孫引きを重ねた結果だとの指摘がなされている。⁽⁸⁾『実験心理学の歴史』は心理学史書の中で最も有名なものの一つだが、英文のこの書すらも原典確認されずに孫引きで誤魔化されて来たのが本当だとすれば、独文を読む研究者の世界的な減少傾向の中、ヴントやフェヒナーのドイツ語原典はなおさら読まれなかったであろうことは想像に難くない。せめて英訳が十分に存在すれば救いはあったのだが、膨大なフェヒナーの著書のうち英訳されたのは『死後の生』についての小冊子』(以下、『死後の生』と略記)や『精神物理学原論』など二、三に過ぎない。しかも『精神物理学原論』の場合、全二巻のドイツ語原典のうち英訳されたのは第一巻のみで、フェヒナーの精神物理学の核心を伝える内的精神物理学を収録した第二巻は今なお独文でしか読むことができない。結果として、心理学者の多くはフェヒナーの哲学的側面を意に介さないボーリングの英文解説のみをたよりにし、知らず知らずのうちにフェヒナーの哲学を評価する芽を摘みとられてしまったものと思われる。

本稿ではフェヒナーの哲学と科学のつながりを示す具体的一例として、初期の思想書『死後の生』と後年の科学的心理学の代表作『精神物理学原論』との関連性について論ずる。

文献は主として、『精神物理学原論』初版(一八六〇)、『死後の生』初版(一八三六)、および『死後の生』第二版(一八六六)を用いた。

次節以降において、次の順で論を進める。まず『精神物理学原論』を有名にした「フェヒナーの法則」の概略について述べる。「フェヒナーの法則」の科学的イメージが強いせいも『精神物理学原論』は一般に科学的心理学の実験手続

きや法則で全編理め尽くされた科学書と目されているが、ところどころにフェヒナー独自の思想的・非自然科学的な記述が含まれている。例えば、「死後の生」や「神」というおよそ科学とは相容れない言葉が用いられたり、意識同士が交流し合うという思想が語られたりする。そこで、そうした思想的・非自然科学的な記述が含まれていることを示す具体例として、いさか闕下における意識についてのフェヒナーの考察を概観・考察する。また、この闕下意識のアイディアの萌芽が、『精神物理学原論』（一八六〇）より二十四年前に刊行された『死後の生』初版（一八三六）においてみられることを検証する。さらに、『精神物理学原論』の六年後に出された『死後の生』第二版（一八六六）に『精神物理学原論』を意識した加筆・修正部分があることを例証する。

なお、『死後の生』に関する先行研究には例えば今井による論考(9)などいくつかあるが、管見では精神物理学との関連を集中的に論じたものは見当たらない。また、『精神物理学原論』に関する従来の研究はその大半が実験心理学的研究方法を論じたものであり、哲学・宗教・思想的視点からの考察は極めて少ない。

三 『精神物理学原論』とフェヒナーの法則

『精神物理学原論』（一八六〇）は、フェヒナーが自ら創始した精神物理学という学を世に問うた記念碑的著作で、五十九歳のときに出版された。第一卷三百三十六ページ、第二卷五百七十一ページの二巻より成る。

まず、この書を有名にした「フェヒナーの法則」の概略を述べる。「フェヒナーの法則」とは、フェヒナーが見出した刺激と感覚の間の法則である。(10)法則という名がついているが自然科学的な法則というよりはむしろ、次のような日常生活経験に由来する経験則である。いま、大勢の人で混雑するパーティー・ホールにいて、ある相手と会話しているとす。

ホール全体が静かなうち、すなわち、会話の背景音が小さなうちは、相手の声は非常にはっきり聞き取れる。このとき相手は小声で話しても大丈夫である。しかしホール内の人々が一斉に大声で話し始めると、相手の声は先ほどまでと同じ大きさで発せられていても聞き取りにくくなる。騒音、すなわち大きな背景音の中で相手の声を感じするためには、前よりも大きな声で話してもらふ必要がある。ここで、相手の言葉を「音刺激」、相手の言葉が聞こえるということを「音の感覚が生じる」と言い換えると、以上の事態は「刺激」および「感覚」という用語を用いて次のように表現することができる。「最初にある刺激が与えられており、それに対してある感覚が生じているとき、刺激をほんの少しずつ増してゆくと、始めのうちは感覚の変化は感じられないが、ある程度以上刺激を増すと感覚の増加が感じられる。そのような感覚の増加は、刺激が小さいうちは、ほんの少し刺激を増加しただけで感じられるが、刺激が大きくなると、刺激を大幅に増加させなければ感じられなくなる」⁽¹¹⁾。これがフェヒナーの法則の内容である。

これを数式化すると次のようになる。最初に与える刺激を β 、それに対する感覚量を γ 、刺激を増してゆくときに感じられる感覚の増加量を $d\gamma$ 、 $d\gamma$ を生じさせるのに必要な刺激の最小増加量を $d\beta$ とすると次の関係が成り立つ。

$$d\gamma = \frac{K d\beta}{\beta} \quad (K \text{ は定数})$$

この式は基本公式 (Fundamentalformel) と呼ばれる⁽¹²⁾。また、基本公式を積分すると次の式が導かれる。

$$\gamma = k \log \frac{\beta}{b} \quad (k \text{ および } b \text{ は定数})$$

ここで、定数 b は、刺激の強さがこの値以上にならないと刺激を感じできない地点、すなわち閾 (Schwelle) における刺激の強さである。この式は測定公式 (Massformel) と呼ばれる⁽¹³⁾。測定公式の要点は「感覚量は刺激量の対数に

比例する⁽¹⁴⁾」ということである。

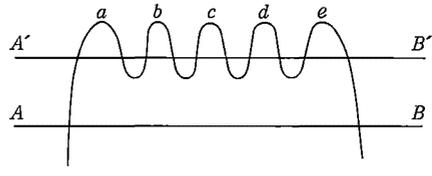
感覺を数量的に記述することが当たり前となった現代人からみれば、この素朴な定式化と式変形は偉業には映らないかも知れないが、フェヒナー以前の時代には心的過程を数量的に記述するのは不可能だとする見解が支配的であり、そうした見解に抗して数量化を試みるのは難事業であった。心を数量的に扱うことが出来なくては、心理学を科学として認めることは出来ないという風潮のただ中であって、フェヒナーは物理世界に属する刺激と心理世界に属する感覺との關係を数量的に記述することに成功し、科学の一分野としての心理学の成立に貢献したのだ⁽¹⁵⁾。

四 『精神物理学原論』における闕下の意識世界——意識の波動モデル——

一般に『精神物理学原論』はフェヒナーの法則に代表される科学的記述の書とみなされており、同書中に思想的・非自然科学的な内容が含まれていることはほとんど知られていない。本節では『精神物理学原論』の思想的・非自然科学的側面の一例として、意識の波動モデルをとりあげ、闕下の意識世界、すなわち無意識の世界に関するフェヒナーの捉え方を探る。

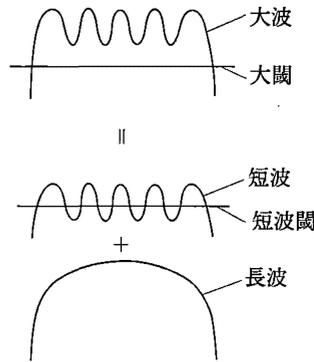
フェヒナーは意識は精神物理学的活動 (psychophysische Thätigkeit)⁽¹⁶⁾ もしくは精神物理学的運動 (psychophysische Bewegungen)⁽¹⁷⁾ によって形づくられると考えていた。

精神物理学的活動は一定強度の静的な活動ではなく、強度がリズムミックに変動する波動的・振動的活動である。自身が第一線の物理学者でもあり、波動理論を熟知していたフェヒナー⁽¹⁸⁾は、このようなリズムミックな精神物理学的活動を説明するのに彼のシェーマを用いた⁽¹⁹⁾(図1)。それによると、精神物理学的活動全体を表現する波は大波 (Hauptwelle) であ



AB: 大閾 (Hauptschwelle)。
 a, b, c, d, e: 短波 (Oberwelle)。
 A' B': 短波閾 (Oberschwelle)。
 出典: Gustav Theodor Fechner: *Elemente der Psychophysik*. II. Leipzig: Breitkopf und Härtel 1860, S. 540. の図を転載。

図1 フェヒナーによる意識の波動モデル



大波(上段)は、短波(中段)と長波(下段)が合成されたものとみなすことができる。

図2 大波と短波・長波の関係を示す概念図

解できる。地球のゆっくりした周期の自転運動を長波とすると、潮の干満のような地球上で繰り返られる個別の短い周期の運動は短波、そして地球上のありとあらゆる周期的な運動は大波、ということになる。

精神物理学的活動の一つである意識活動も波のシエーマで理解される。例えば、覚醒中すわなち意識ある状態と、睡眠中すわなち意識のない状態とは、みかけは全く異なるが、これら二状態は同一の意識活動が閾の上下に運動することで分化した姿だとみなされる。グラフの縦軸に意識活動を、横軸に時間をとったとき、縦軸は意識値 (Bewusstseinswerthe) を意味する。フェヒナーは意識の閾に識閾 (Schwelle des Bewusstseins) という名を与え、識閾以下の領域すわなち意識値が負の値をとる領域を、意識のない状態とみなした。⁽²²⁾ 意識活動が識閾の上にあるときに意識ある状態(覚醒)、識閾の下にあるときに意識のない状態(睡眠)⁽²³⁾である。意識活動は識閾をはさんで日々リズム的な活動を続

ける。ちなみにフェヒナーは、こうした振動的な意識活動を内界の生命的振動 (Lebensoscillation der Seele) とも呼んでいた。⁽²⁴⁾

覚醒中、すなわち意識活動が識閾の上にある間、意識活動の強度は常に一定に保たれるわけではない。例えば、覚醒中に意識を集中して考え事をした後で、疲れてぼんやり意識を弛める場合などは、覚醒意識であることに変わりはないが意識活動の強度は短時間のうちに細かく変化する。こうした短時間の変化は波のシエーマでは短波で表現される。また、睡眠と覚醒のような一日単位の長い周期の意識活動は長波で表される。

以上は、個人の意識活動を大波に見立てた場合の波のシエーマの解釈例である。波のシエーマは、別の解釈にも転用できる。たとえば、フェヒナーは個々人の意識を生み出す母体である大意識 (Hauptbewusstsein)⁽²⁵⁾ の存在を想定するが、大意識を大波と見立てることもできる。その場合、波のシエーマは大意識と個々人の意識の関係を表わす (図1)。このとき個々の短波 (図1の a、b、c、d、e) は個々人の意識に相当するが、それらはいずれも一つの大波、すなわち大意識の一部が変形して生じたものと解釈される。個々人の意識はみかけは独立だが、同一の大意識を母体として共有するため、大意識を介して相互に連関する。なお、図1の AB は大波の閾 (Hauptschwelle) と名づけられている。フェヒナーによれば、大意識が大閾を超えたとき、個別の個体意識が生まれる。

ここで、意識モデルによる記憶や表象の捉え方を眺めてみよう。長らく忘れていた記憶がふと甦るときのように、一時消失していた表象が再び現れることがある。このとき表象はどこに隠れていてどこから姿を現したのか? フェヒナーの答えは次のようなものだ。ある像がわれわれの眼に入ると、その像はわれわれ個人の意識、すなわち短波と結びつけられる。短波が図1の大閾 AB を超えている限り、短波と対応するものが大波にも生じる。⁽²⁶⁾ 言い換えれば、短波の出来事は大波に反映される。短波と大波のこうした結びつきのおかげで、眼から像が消え去った後もなお、像の記憶の残響

は残る。そしてその残響は、より一般的な記憶と思考、ないし大意識の記憶と思考から成る、より高次の世界へ入るの⁽²⁷⁾である。そして大波の中の表象の痕跡が再び短波に影響を及ぼし返したとき、記憶は甦るとフェヒナーは主張する。表象はどこへ行きどこから来るのか、この答えは、大意識から生まれ来て、大意識へと還りゆく、である。

フェヒナーは睡眠―覚醒時の意識についても同様に考える。意識は眠りとともに消え、目覚めとともに再び現れる。では、この間われわれの意識はどこから来てどこへ行くのか？ この答えも、大意識から生まれ大意識へ還る、である。⁽²⁸⁾

意識モデルに従えば、個体意識は大意識から枝分かれするように派生するものだが、いったん派生した後も、睡眠や忘却の度に母体である大意識に帰還するのだ。目覚めたり何かを思い出したりすることに、われわれの意識は常に新たに生まれ変わっている、これがフェヒナーの示唆するところである。

ところで、消滅と再生を繰り返すわれわれの意識は、死後どうなるのか？ 生前の意識や表象は、一見消滅したように見えても完全に消滅するわけではなく、その痕跡が姿を変えて大意識の中に残るといことをわれわれは既にみてきた。フェヒナーによれば死後の意識も同様である。ただしフェヒナーは、死後の意識が生前の人格を保ったまま存続するという俗説の主張とは異なり、生前の人格が死後もそのままの形で保たれるとは考えていない。人格が保たれるわけではないが、すべてが完全な無に帰するわけでもない、個体意識は消え失せたように見えるが、その痕跡は大波すなわち超個体的世界の中に残り続ける、というのがフェヒナーの主張である。その意味で、個体意識が世界から完全に消滅することは無い。フェヒナーは死後の存続について次のように信じてよいと言う。われわれの精神は、死後、より高次の精神世界、すなわち神の中へ入るのだ。⁽²⁹⁾

フェヒナーは牧師の息子であり自身もキリスト教徒であるが、フェヒナーの神は正統的なキリスト教の神ではなく汎

神論的な神、すなわち「その中にあらゆる精神が生息し、活動し、存在するような、自然界に偏在する意識ある神」⁽³⁰⁾である。こうしたフェヒナーの神観念をみると、フェヒナーの哲学や存在論が後の科学者たちに無視された原因は、それらが非科学的なことばかりではなかったかも知れないと思われる。フェヒナーの神が異教的性格を帯びていたことも一因であった可能性があらう。

以上、科学書と目されている『精神物理学原論』に「死後の生」や「神」についての記述がみられることを確認した。この書の背後に哲学的・思想的動機が潜むことは明らかであろう。以下で、『精神物理学原論』（初版一八六〇）の発想の萌芽が、『死後の生』（初版一八三六）においてすでに見られることを検証する。

五 『死後の生』の出版

『死後の生』 (*Das Buchlein vom Leben nach dem Tode*) 初版はフェヒナー三十五歳の一八三六年にドレスデンの書店 Grimmer からペンネーム Dr. ミーゼス (Dr. Mises) 名で出版された⁽³¹⁾。大判の手帳サイズで総ページ数五〇ページの小冊子である。当時のフェヒナーは翻訳で生計を立てたり大学で無給講師を勤めたりした後、一八三四年になってようやくライプツィヒ大学の物理学の教授に就任したばかりであり、⁽³²⁾ 科学者としての地位をこれから確立しようという時期にさしかかっていた。ペンネームが用いられたのは、地位を確立する前に、死後の生というアカデミズムからは受け入れられ難い書物を本名で発表するのは避けた方が賢明であるという判断だったのであらうか。

第二版はフェヒナー六十五歳の一八六六年にライプツィヒの出版社 Leopold Voss から出された⁽³³⁾。『精神物理学原論』が出された六年後であり、すでに学者としての名声が高まっていたためか、この第二版以降の『死後の生』は本名のフェ

ヒナー名で刊行されている。初版が九章から成るのに対し、第二版では章が追加され十二章構成である。また、章によっては大幅な加筆がみられる。第三版はフェヒナー没年の一八八七年に Leopold Voss から出されているが、第二版と比べ大きな変更はない。⁽³⁴⁾

六 『死後の生』初版（一八三六）における精神物理学の萌芽

まず、フェヒナーが精神物理学を打ち立てるはるか以前の 一八三六年に出版された『死後の生』初版の内容を確認しよう。この時点ではフェヒナー自身、二十四年後に『精神物理学原論』を書くことになるとは予想もしていなかったはずである。

「人はこの世に一度だけ生まれるのではなく、三度生まれる。生の第一段階は絶えざる眠り、第二段階は睡眠と覚醒の交替、そして第三段階は永遠の覚醒である」⁽³⁵⁾。『死後の生』の冒頭でフェヒナーは、人は三度生まれるという。われわれはこの世に生れ落ちる前、母親の胎内で過ごす、フェヒナーの言う生の第一段階とは、この胎児の段階のことである。胎児は暗い母胎の中でひたすら眠りの生活を送る。第二段階とは、母胎を離れてこの世に誕生した後の、睡眠と覚醒を交互に繰り返す段階のことである。われわれは通常この第二段階のみを生と呼び、その後を訪れる段階を死と呼ぶ。それに対しフェヒナーは、死を「生の第三段階」と位置づける。では、眠りの第一段階と、眠りと目覚めの交替の第二段階から類推すると第三段階とはいかなる段階か？ フェヒナーによれば、それは覚醒が永遠に続く段階である。

胎児の第一段階には肉体が次第に発達し、眼や耳や口など様々な器官がつくられる。それらの器官は胎児にとって十分に必要なものではないが、生後の第二段階には不可欠なものである。要するに、第一段階は第二段階に必要な肉体を

準備する期間である。われわれが器官の有り難みを知るのは、生後、感覚が十分に発達してからのことである。フェヒナーは次のように類推を続ける。第二段階の生後まもなくの間、精神はまだ未発達の萌芽状態にあるが、成長につれ、この精神の萌芽は発達する。第二段階の精神の発達は、第三段階を迎えるための準備なのではないか、精神は第三段階に達してはじめて十全に役立てられるのではないか、と。我々は、生の目的を知らされぬままこの世に投げ出されているが、われわれの営みは、決して死と同時に無に帰するものではないとフェヒナーは説く。第二段階に住むわれわれが理由もわからずに為すあらゆる精神活動、すなわち、思索や情念や祈りなどは、フェヒナーによれば第三段階における高次の精神生活のための準備なのである。

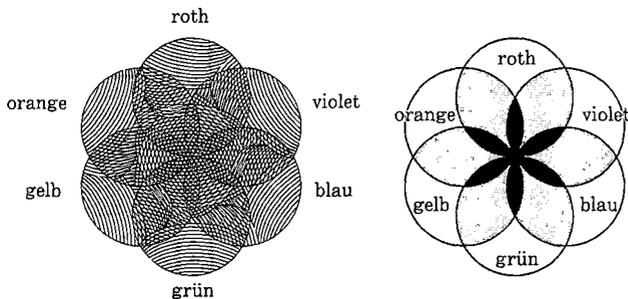
ここで、『死後の生』初版執筆時のフェヒナーが、個体と精神との関係をどのように考えていたかを眺めてみよう。

人間は、自分はそのために存在すると考えている。すなわち、自分自身の肉体的・精神的な成長のために楽しみ、活動し、創造するものであると考えている。人間は、たしかに自分のためにも存在するが、同時に人間の肉体と精神は、他の存在の単なる住処に過ぎぬものでもある。その住処の中へと、より高度な他の精神が入り込み、からみあって発達し、様々な過程が互いに入り乱れて進行して行く。それらの過程は、同時にまた人間が感じたり考えたりする事なのであり、第三段階の生に対して、より高度な意味をもつものである。⁽³⁷⁾

われわれ一人一人の精神は互いにまったく孤立し独立してはいない、という思想が読みとれよう。さらにフェヒナーは、われわれが感じたり考えたりする過程は一個人の精神の中に閉じられたものではない、個人の精神活動には、より高度な精神、すなわち神の活らぎが関与しているのだ、と主張する。

人間の精神は、人間の精神のものであると同時に、あの高度な精神のものであり、いずれのものなのか見分けがつかない。そして人間の精神の中で起こる事は、常に同時に両者に属するのであるが、その属し方は異なるのである。⁽³⁸⁾

『死後の生』からの以上の二つの引用には、個人の精神活動は個人を超えたものであり、より高度な精神、すなわち



左図：『死後の生』初版の概念図。波模様で示された6つの円は、それぞれ赤 (roth)・橙 (orange)・黄 (gelb)・緑 (grün)・青 (blau)・堇 (violet) の6色の光線を表わす。

出典 (左図)：Dr. Mises: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. Dresden: Grimmer 1836, S. 16. より転載。

右図：『死後の生』第2版の概念図。6つの円が重なり合って、中央部分に星形 (黒く塗られた部分) が生じる。

出典 (右図)：Gustav Theodor Fechner: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 2. Aufl. Leipzig: Voss 1866, S. 16. より転載。

図3 波のシェーマ

神の精神にも所属するという思想がみられる。この思想が、その二十四年後に出される『精神物理学原論』の意識モデルに再び現れることは、すでにみてきた通りである。意識モデルでは、個体意識は短波で表現され、短波に生じた出来事の痕跡は大波、すなわち超個体的世界 (神) の中に残り続けるのであった。以上で、個体の死後も個体の精神はより高次の精神、すなわち神の中で生き続けるという『精神物理学原論』の思想のルーツが『死後の生』にあることを確認した。

ところで、『精神物理学原論』の意識モデルは波のシェーマで表現されていた。フェヒナーが何時から波をモデルに思考をすすめるようになったのか定かではないが、『死後の生』初版の時点ですでにその徴候は認められる。以下で確かめよう。

この図は模写ではなく、単なる象徴あるいは比喩にすぎない

もりの図であるが、まさにこの図では、中央にある色の付いた星形は自立体、すなわち内的統一性を内包するものであるとみなすことができる。しかしその星形は、六つの単色の円、——それらの各々の円もそれ自体内的統一性を有しているのだが——、が連結してただ合流したに過ぎないものである。そして円が発する各々の光線も、星形自身にも属していると同時に、また、互いに重なり合うことよって星形を生み出した円にも属しているのである。人間の魂 (Seale) についてもそういうことがいえる (図3³⁹)。

図3の左図には、互いに重なりあった六つの波模様が描かれている。六つの波模様は、それぞれ赤・橙・黄・緑・青・堇の六色の光線を表わす。左図の中央部分では、六つの波模様が交差して星形を形づくっている領域が認められる。『死後の生』初版から転載したこの図では、引用文中の「色の付いた星形」が何を意味するか判別しにくい。図3の右に『死後の生』第二版の修正された図を転載したが、こちらの図で星形を確認されたい。

フェヒナーが図3左図のように光線を波模様で表したのは単なる偶然ではないと思われる。フェヒナーは、光は粒子であるか波動であるかという古くからの論争に関して、波動説を支持していた。⁽⁴⁰⁾ それについて次のようなエピソードが残されている。フェヒナーは電磁気学のビオ・サバールの法則で有名なフランスの物理学者ジャン・バプティスト・ビオ (Jean-Baptiste Biot; 1774-1862) の物理学の教科書をドイツ語に翻訳し出版したことがあるが、ビオは光の粒子説を固守していた。ところが、波動説派のフェヒナーは、当時フレネルの実験によって波動説が優勢になったことも手伝って、ビオの教科書の光学に関する記述を波動説に沿ったものに独自に改変して出版したという。⁽⁴¹⁾ いかにもフェヒナーらしいエピソードである。

さて、図3に戻ろう。六色の波模様が重なり合って生じた星形は、独立した個体のように見える。事実、星形が発す

るのは、六つの円が発する六色が混じり合っただけで、もとの六色のいずれとも異なる光線である。しかし、星形が発する光線は、それ自身単独で存在するものではなく、六色の光線の存在が背後にあつてはじめて出現することができる。フェヒナーは、独立した存在のようにみえるわれわれの魂 (Seele) も、実はこの星形のようなものであり、背後に他者の六色の魂の存在なくしては決して存在し得ないのだ、と述べている。星形に見立てられる個人の魂は、他者の魂が多数合流して生じた「結節」なのである。結節であるがゆえに、個人の魂に何かの出来事が生じるとき、その出来事は結節を構成する他者の魂にも影響を及ぼすのであり、反対に、他者の魂に何かが起こったとき、その影響は個人の魂に届くのである。魂や精神や意識は個体を超えて交流する、それがフェヒナーの主張である。

ところで、図3の波のシェーマでは、波同士の空間的な交流については述べられているが、時間的な交流については触れられていない。これに対し、すでにみたように『精神物理学原論』の意識モデルでは、視覚像を記憶したり想起したりするごとに、視覚像の記憶痕跡が短波から大波へと、あるいは大波から短波へと行き来するような、短波と大波との時間的交流関係が語られていた。『死後の生』初版の波のイメージがフェヒナーの中で長年暖められ、後に時間的ダイナミクスと闘の概念がつけ加わって、『精神物理学原論』の意識モデルとして結実したのであろう。

以上で『死後の生』初版に、後の『精神物理学原論』における波のシェーマの萌芽がみられること、および、同じく『精神物理学原論』で論じられることになる超個性性のモチーフが波のイメージを用いつつ論じられていることを確認した。

次に、多数の精神の結節である個体の精神は死後どうなるか、ということについてのフェヒナーの考えをみよう。

しかし、人間が死んだら、その肉体の腐敗と共にあの結節は解けるだろう。精神はもう結節に束縛されることな

く、今や全く自由に自然界に流れ出るだろう。精神はもはや、光波や音波が自分の目や耳を打つときに光波や音波を単に感じるだけでなく、自らが光波や音波のようにエーテルの海や空気の中の音をゴウゴウと音を立てて進んで行くだろう。もはや、風や海にどっぷり浸かった自分の体に向かって、風が吹き寄せ、海の波が打ち寄せるのを単に感じるだけでなく、空気が海の中を自らザワザワとざわめき行くであろう。もはや、森や草原の緑の中を独りで歩いて行くだけでなく、その中を歩いて行く人々と共に森や草原を感じながら突き抜けて行くのだろう。⁽⁴²⁾

まず注目すべきは、精神がまたしても波のイメージで捉えられていることである。フェヒナーによれば精神は光波や音波と同様、エーテルの海や大気⁽⁴³⁾の海をつき進む波のようなものだ。個体の精神は完全な独立自存の存在ではなく、多数の他の精神の結節体、比喩的にいえば図3の星形のごとき存在であった。フェヒナーは、人が死に、体が腐敗すると精神は体から離れて自由になると述べている。星形は崩れるが、それまで星形に保たれていた精神は自由な姿になり、より広い世界へ流れ出るのだという。『精神物理学原論』の意識モデルを思い出せば、そのとき個体の精神は生前の人格を保ったまま存続するわけではないが、その痕跡を超個体的世界あるいは神の世界に残すのだった。『精神物理学原論』によれば、個人が感じたり考えたりするとき、その背後には常に大波によって表現される超個体的世界の活動の関与があった。換言すれば、人が何かを感じるとき、けっして一人で感じているわけではなく、いつも超個体的世界の活らきと共に感じているのであった。『死後の生』の右の引用部分は、そのことを述べている。

フェヒナーによれば、死後、個体の精神は超個体的精神に合流し溶け込むのだが、超個体的精神は見たたり聞いたりする際に、眼や耳を必要としない。眼や耳という器官を介さねば自然界に存在する光や音を感じてきないのは第二段階のわれわれにとっての話である。第三段階の精神には、感ずるのに器官など不要である。なぜなら、とフェヒナーは次

のように述べる。

生ける自然という泉から光や音を汲み出すために、われわれは次の生へも眼や耳をまだ一緒に持って行く必要があるのだろうか、いや、その必要はないだろう。なぜなら、われわれ自身がこの泉と化してしまっているからである。⁽⁴⁴⁾

ここで述べられている、死後われわれ自身が泉、すなわち超個体的世界と同化するという思想は、先にみた『精神物理学原論』の、われわれの精神は死後完全に消滅するわけではない、精神の痕跡が姿を変えて、より高次の精神世界(神の世界)へ入るのだ、とする思想と根を同じくすることは明白であろう。ここでフェヒナーが自然を生きた存在、すなわち「生ける自然」(lebendige Natur)と捉えていることも注目に値する。

さて、個体の精神は死後自由になり広い世界へ流れ出るとのことであったが、広い世界とはいったいどこであろう？ この世とは全く異なるあの世のことなのだろうか。フェヒナーは、そうではない、地上の自然なのだ、と次のように述べている。

第三段階の精神は、人類自身もその一部である地上の自然の中に、まるで共同の肉体の中に住むように住んでいるのであろうし、また自然の全ての過程は、第三段階の精神にとってみれば、現在のわれわれの肉体の過程と同じものとなるであろう。第三段階の彼等の肉体は共同母として第二段階の生における肉体を包んでいるのであろう。それは、まさに第二段階の肉体が第一段階の肉体を包んでいるようにである。⁽⁴⁶⁾

フェヒナーは第三段階の精神は、この地上の自然の中に住まうと述べる。第三段階の精神にとつて、この世の自然は、様々な精神が共に宿る共同の肉体のようなものである。では、第三段階の肉体とはどのようなものなのか？ ここでまたフェヒナーは類推する。第一段階すなわち胎児の肉体が第二段階すなわちこの世の母胎によって包みこまれるように、この世の全ての肉体は第三段階のいわば共同の母胎によって共に包まれているに違いない、と。ここにも『精神物理学原論』の短波と大波との相互交流の思想の芽を読み取れよう。

以上、『精神物理学原論』の死後の存続説と『死後の生』の記述とが呼応していることを確認した。

七 『死後の生』第二版（一八六六）における加筆・修正部分と精神物理学

一八六〇年の『精神物理学原論』刊行によりフェヒナーは科学者としての名声を博することとなるが、その六年後の一八六六年、それより三十年前にDr.ミーズス名で出版した『死後の生』の第二版をグスタフ・フェヒナーの本名で出している。

『死後の生』第二版（一八六六）では、初版（一八三六）に比べ章立てが若干変更されており、随所に大幅な加筆・修正が見られる。特筆すべきは、二つの版の間に世に出た『精神物理学原論』（一八六〇）を意識したと思われる加筆が目につくことである。フェヒナーは、無視されがちであった若き日の著書『死後の生』の所々に精神物理学の芳香を織りこむことで『死後の生』を再生させようとしたのかも知れない。ただし、仮にそうした意図があったとしても、『死後の生』と『精神物理学原論』とが何ら思想的関連性を持たずに全く独立に書かれたものであったなら、両者を融合させた加筆は不可能だったであろう。そのような融合が可能であったのは、すでに見たように『死後の生』初版の中

に、精神物理学的思想の萌芽が潜んでいたからに他なるまい。以下で『死後の生』第二版の加筆・修正部分から、『精神物理学原論』を意識したと思われる箇所を二、三例示する。

まず、『精神物理学原論』の意識モデルにおける個人間の意識の交流に関連した描写例を挙げる。個人間の意識交流に関連した描写は、これまでみてきた通り、すでに『死後の生』初版の図3を用いた説明箇所にも存在するが、第二版では波紋(Wellenkreise)概念を用いつつ、より詳しい描写が補われている。

水中に沈み行く石が残した波紋は、水面から突き出ている石にぶつかって、その周囲に新たな波紋を生むが、もとの波紋は依然として内的に連関した一つの波紋なのであり、生じた全ての波紋を自分の領域に包含する。けれども石は、波紋全体の断片を知るにすぎない。われわれは、ちょうどこの無知なる石のようなものだ。ただし、われわれは頑なな石とは違って、一人一人が生時すでに自分で自分の周囲に一つの連関した作用圏を形づくっており、その作用圏は、他者の圏の周囲に広がるのみならず他者の圏の内部にまで入り込んでいるのである。⁽⁴⁸⁾

次に、『精神物理学原論』を意識していることがさらに明白にわかる加筆例を挙げよう。識閾(Schwelle des Bewusstseins)という『精神物理学原論』でみられた概念が登場する箇所である。

しかし、意識はそのような広大な基盤を保持しながら、いかにして自己の統一性を保つことができるのか？ 意識は如何にして識閾の法則に耐えうるのか？⁽⁴⁸⁾

この引用箇所最後にフェヒナーは『精神物理学原論』の書名を明記した次の脚註をつけている。

体 (Leib) と心 (Seele) の関係のこうした経験則は次のようなものである。すなわち、意識が依存する体の活動が、闕と呼ばれる一定強度以下に沈むとき、意識は必ず消失するという法則である。さて、体の活動は広がれば広がるほど弱くなるので闕の下にいつそう容易に沈みやすくなる。意識全体には闕があり、睡眠と覚醒の境界をつくる。それと同じように、意識全体の中の特殊な意識にもみな闕がある。特殊意識は、特殊意識が依存する体の特殊な活動が特殊闕 (Sonder-Schwelle) を超えたり特殊闕下に沈んだりするのに応じて、意識の中に現れたり消えたりする。(『精神物理学原論』第十章三十八、三十九、四十二頁参照)⁽⁴⁹⁾

以上、『死後の生』第二版中に明らかに『精神物理学原論』を意識した加筆がなされていることを確認した。フェヒナーにおいて『死後の生』と『精神物理学原論』とが実に密接な関係にあったことがいつそう明瞭になったであろう。

八 おわりに——フェヒナーの生命思想の特徴——

これまで『精神物理学原論』と『死後の生』を手がかりに、フェヒナーの科学的著作と哲学的・存在論的著作との間に密接な関係があることをみてきた。最後に、フェヒナーの生命思想の特徴をまとめ、結びにかえる。

特徴の第一は、生命の活らきを波動的・振動的諸相として捉える点にある。フェヒナーには生命的振動という概念があった。睡眠・覚醒の交替も生と死の変転も、フェヒナーにとっては生命のリズミックな活動の姿である。

特徴の第二は、「生命は消滅しない」という思想である。フェヒナーに従えば、死ぬのは個体であり生命ではない。個体は死んでその姿を消しても、個体の活動の痕跡は個体の活動を生み出した母体、すなわち意識モデルにおける大波へと還るのである。大波は、時折り識闕より上に一部分だけ顔を出すことがあるものの、通常、その大部分を識闕下に沈潜させている。識闕下は意識の存在しない無意識の領域である。識闕上が意識を形づくる活らきに満ちた世界だとすれば、識闕下をフェヒナーは、そうした活らきが微塵も存在しない虚無の世界と捉えてもよかつたであろう。しかし彼は異なる捉え方をした。フェヒナーにとっての識闕下の領域は活らき無き虚無の世界ではなく、識闕を越え世に姿を現わす前の精神物理学的活動が、息を潜めつつも感覚や表象を生み出す準備をし続けている世界である。⁽²⁰⁾ もしも闕下世界や大波の世界が虚無の世界であるならば、そこに吸収される生命も無に帰してしまふであろう。しかし、フェヒナーの活らきに満ちた闕下世界では生命は消滅しない。「生命は消滅しない」、および「闕下世界が活らきをもつ」という二つの思想は表裏一体の関係にあり、ともにフェヒナー思想の重要な特徴である。

第三は、意識や精神等、生命の活らきの超個性性・共同性である。フェヒナーにとって、個体の意識は眼りとともに大意識に還り、目覚めとともに大意識からやってくるもの、すなわち、日々生まれ変わるものである。そして大意識は、個体を超えた多数の意識が交流する場である。よって個体の意識は日々、他者の意識との交流によって形づくられることになる。フェヒナーによれば、意識や精神は死後も大意識に吸収され、さらなる交流と発展を続ける。

第四は、「生ける自然」の思想である。フェヒナーの神は「その中にあらゆる精神が生息し、活動し、存在するような、自然界に偏在する意識ある神」であるが、フェヒナーの自然とはそうした神の活らきに溢れた自然、まさしく「生ける自然」である。

そして特徴の第五は、「此岸、即、彼岸」の思想である。第三段階の世界、いわゆる死後の世界とは、どこにあるか？

フェヒナーによれば、それは「あの世」でも「天国」でもなく「この地上の自然」である。フェヒナーにとって此岸とは、即、彼岸、すなわち死後の存在がこの世の生者と共に存在し、生者の内で活らき続ける世界である。⁽⁸¹⁾⁽⁸²⁾

フェヒナーが没してほぼ百二十年、フェヒナーの時代には信じてきた「生ける自然」や「自然界に偏在する神」が失われて久しい。フェヒナーを手がかりに生命的世界を復権すること、それが今後のわれわれの課題である。

略号

フェヒナーの文献は次の略号で表記する。

EP: Gustav Theodor Fechner: *Elemente der Psychophysik*. Erster und zweiter Theil. Leipzig: Breitkopf und Härtel 1860.

(第一巻「聲」二巻「心」をさし「EP I」「EP II」と表記)

BLT 1: Dr. Mises [Gustav Theodor Fechner]: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. Dresden: Grimmer 1836.

BLT 2: Gustav Theodor Fechner: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. 2. Aufl. Leipzig: Voss 1866.

註

- (1) 心理物理学とも訳される。
- (2) 木田元『マッハとニーチェ——世紀転換期思想史——』東京、新書館、二〇〇二年、五〇頁参照。
- (3) 同書。
- (4) Edward S. Reed: *From soul to mind. The emergence of psychology from Erasmus Darwin to William James*. New Haven: Yale University Press 1997, p. xv.
- (5) Joy Paul Guilford: *Psychometric methods*. 2nd ed. New York: McGraw-Hill 1954, p. 20.
- (6) Edwin Garrigues Boring: *A history of experimental psychology*. 2nd ed. New York: Appleton-Century-Crofts 1950, p. 283.

- (7) Ibid., p. 275.
- (8) 高橋澄子「実験心理学の独立——ヴント——」梅本堯夫・大山正編『心理学史への招待——現代心理学の背景——』東京、サイエンス社、一九九四年、九六頁。
- (9) 今井道夫「グスタフ・テオドル・フェヒナーの哲学(二)——『死後の生についての小冊子』——」『札幌医科大学人文自然科学紀要』第二十三巻、一九九二年、一—七頁。
- (10) Vgl. EP I, S. 64. フェヒナーの法則という呼称は後世の人々によるものであり、フェヒナー自身はこの法則に関連する研究を行ったエルンスト・ハインリッヒ・ウェーバー(Ernst Heinrich Weber; 1795-1878)の名をとって「ウェーバーの法則」と呼んでいた。
- (11) Ebd.
- (12) EP II, S. 10.
- (13) Ebd., S. 12f.
- (14) Ebd., S. 10.
- (15) Vgl. ebd., S. 10, 13. フェヒナーが心の数量的記述において成功を収めた要因は感覺量(Empfindungsgrösse)という概念の導入にあると思われる。感覺を「量」として扱うことが妥当なのか否かについて、いくつか論争がなされたが、感覺量擁護派が優勢であった。現在では感覺を量化して扱うことに違和感を感じるものは少ない。しかし、私見では感覺の量化は誤りである。このことに関しては機会を改めて論じたい。
- (16) Ebd., S. 428.
- (17) Ebd., S. 437.
- (18) 物理学史のある論文には十九世紀ドイツの電磁気学の発展に貢献した中心人物として、ガウス、オーム、ヴィルヘルム・ヴェーナー等とともにフェヒナーの名が挙げられている。Kenneth L. Caneva: From galvanism to electrodynamics. The transformation of German physics and its social context. *Historical Studies in the Physical Sciences* 9, 1978, p. 65. を参照。また、フェヒナーは一八三二年に物理学の学術雑誌(*Repertorium der Experimental-Physik*)を刊行している。この雑誌はドイツにおける最初の物理学の学術雑誌とみなせるものである。その中でフェヒナーは物理学や数学が当時最先端にあったフランスの研究者、フレネル、アンペール、ポワソン、ラプラス、ナビエ、コーシー等の研究成果をドイツに翻訳・紹介したが、それら

の中に波動関係の理論が含まれていた。Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur. Gustav Theodor Fechner's wissenschaftlich-philosophische Weltauffassung*. Frankfurt am Main: Klostermann 1993, S. 42. を参照のこと。

- (19) EP II, S. 455.
- (20) Oberwelleには「上部に位置する波」という意味以外に、短い周期の波である「短波」「高調波」「調波」のニュアンスもある。フエヒナーは、Oberwelleを「上部に位置する短い周期の波」という意味で使用している。Oberwelleには「上波」あるいは「上部波」等の訳語をあてるのが標準的であると思われるが、フエヒナーのOberwelleは「上」も「上部に」位置するわけではなく、場合によっては閾のはるか「下部に」位置するところもある。それゆえ、「上波」や「上部波」等、「上」という文字だけが強調された訳語をあてること混乱を招きやすい。本稿では、訳語による理解の混乱を避ける目的で「上部短波」「短波」と略記)と訳した。また、同じ理由で Unterwelle を「下部長波」(「長波」と略記)とした。Ebd., S. 455, 458. を参照。
- (21) Vgl. ebd., S. 438, 441, 442. フエヒナーの法則におおむね登場する閾は、刺激強度が一定の値を超えたときに初めて感覚が出現する地点、すなわち感覚領域—無感覚領域の境界点のことであった。これに対し、ここでも述べた識閾は意識領域—無意識領域の境界点のことである。
- (22) Ebd., S. 441.
- (23) Ebd., S. 437 f.
- (24) Ebd., S. 442.
- (25) Ebd., S. 529, 540.
- (26) Ebd., S. 543.
- (27) Ebd., S. 542 f.
- (28) フエヒナーは夢についても考察しており、夢が上演されている舞台は、覚醒時の舞台とは別である (Ebd., S. 520, 523) とその考えを示しているが、この考えはフロイトにも影響を与えた。フロイトの精神分析学に与えたフエヒナーの影響については、Henri F. Ellenberger: *Fechner and Freud. Bulletin of the Menninger Clinic* 20 (4), 1956, p. 288 (以下を参照のこと)。
- (29) EP II, S. 543.
- (30) Ebd., S. 542.
- (31) BLT. I. なお、復刻版の中には初版の復刻版であるかのような体裁をとりながら、実際はそうでないものが存在するので注意

が必要である。例えば Reichl Verlag der Leuchter から一九九五年に出た Gustav Theodor Fechner: *Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*. St. Goar: Reichl Verlag der Leuchter 1995. [nachdruck] は「扉に「初版 一八三六年」と記載されているが、中身は初版とは大きく異なっており、原書第二版・第三版とも違っている。

(32) Johannes Emil Kuntze: *Gustav Theodor Fechner (Dr. Mises). Ein deutsches Gelehrtenleben*. Leipzig: Breitkopf und Härtel 1892, S. 82.

(33) BLT 2.

(34) フェヒナーの本は、「二・三を除き翻訳されていない。『精神物理学原論』ですら、わずかに英訳があるのみである。しかもその英訳は、原書上下二巻のうち第一巻目しか刊行されなかった。そうした中で『死後の生』は例外的に英語、イタリア語、日本語など数カ国語に訳されており、とりわけ英訳と日本語訳は複数の出版社から何度か出されている。ただし、そのいずれもがドイツ語原書第二版以降の翻訳であり、私見では初版の翻訳は存在しない。

(35) BLT 1, S. 1.

(36) Ebd., S. 5 ff.

(37) Ebd., S. 15 f.

(38) Ebd., S. 16.

(39) Ebd., S. 16 f.

(40) Vgl. Wilhelm Wundt: *Gustav Theodor Fechner. Rede zur Feier seines hundertjährigen Geburtstages*. Leipzig: W. Engelmann 1901, S. 6.

(41) Ebd., S. 4 ff.; EP II, S. 417.

(42) BLT 1, S. 41 f.

(43) Ebd. 光は古くは粒子的な存在と考えられていたが、その後、粒子的性質と波動的性質の両方をあわせもつことが知られるようになった。波とは、何らかの媒質の振動である。したがって、真空中を光の波が伝わるのならば、真空中に光の振動を許す媒質、言い換えれば光の波の伝播を可能にする媒質が存在しなければならない。そのような仮想的媒質はエーテルと呼ばれた。フェヒナーの時代にはエーテルの存在は信じられていた。しかし、フェヒナー没年の一八八七年以来、マイケルソンとモーリーが何度か繰り返しエーテルの存在を証明するための実験の結果は、エーテル説に対して否定的なものに終わった。以来、エーテル

の存在は疑問視されるようになった。

- (44) Ebd., S. 42.
- (45) EP II, S. 543.
- (46) BLT 1, S. 42.
- (47) BLT 2, S. 7f.
- (48) Ebd., S. 55f.
- (49) Ebd., S. 56.
- (50) EP II, S. 439.
- (51) BLT 1, S. 8.
- (52) 本稿でまとめた五つの特徴のうち第三および第五の特徴については、今井も同様のことを言及している。今井、前掲論文、四頁以下参照。

(いわぶち・あきら 情報コミュニケーション学部助教授)